

「葦」第42号発刊によせて

奈良県立医科大学附属病院

看護部長 正木 幸美

「葦」第42号の発刊に当たり、命名の由来を1969（昭和44）年9月発刊の第1号で調べてみました。当時「葦」「足跡」「瑞木」などの候補から根強く成長し、発展し、素晴らしい足跡を残していけるよう投票で決定したとあり、編集後記には今後の教育活動が一人一人の自覚によって大きく前進することや葦が教育水準を測る物差しとなるよう期待することが記載されていました。また、表紙の題字は緒方準一学長、裏表紙の絵は堀浩病院事務代理の手によるもので先輩たちの思いとともに現在まで脈々と受け継がれてきました。それから40数年の時を経て「葦」は期待どおり大きく前進・成長しています。

2010年12月に病院機能評価 Ver6を受審し無事認定を受けることができましたが、その時臨床で実際に役立てている研究はありますか？という質問がありました。大学病院に勤務する看護職に期待される役割・看護の質や看護倫理が問われるなか、葦に掲載される研究は一つの目安になります。小山秀夫は著書のなかで「実践は問題発見の場であり、研究は問題解決の方法を提供し、研修は質を維持させるためにある」と述べています。私たちは専門職として常に新しい知見が求められています。臨床現場は看護研究の宝庫であり、看護部の方針にある「科学的根拠のもとに」の根拠とは、事実に基づいた証拠ともいえます。臨床での看護研究は検証・実践できることが大事であり、より質の高い看護ケアに繋がることだと考えています。葦に掲載される研究は多くの人たちの協力と努力で実を結んだものであり看護部の実践の証だと言えるでしょう。40数年に及ぶ実績を継承し、新たなる問題を発見・解決方法を見出し、様々な職種との協働のなかでケアの心を大切にしながら活躍する看護職の姿には心躍るものがあります。

2010年は看護学科との協同・連携の一步を踏み出した年でもあります。「人間を愛する心とかけがえのない命を大切にします」という理念のもとで育まれ紡がれてきた私たちの看護の心が、臨床と教育の垣根を越えて受け継がれ、新たなる葦へと飛躍することを願っています。